

ゴールデン・バット事件

海野十三

青空文庫

あの夜更よふけ、どうしてあの寂しい裏街を歩いていたのかと訊きかれると、私はすこし顔あかが赭あかくなるのだ。

兎とに角かく、あれは省線の駅の近所まで出て、円タクを拾うつもりで歩いていたのであった。連れつれが一人あった。帆村ほむら荘そう六ろくなる男である。——例の素人しろうと探偵の帆村氏はんむらじだった。

「君の好きらしい少女は、いつの間にやら居なくなつたじゃないか」と帆村が云つた。

「うむ——」

私は丁度ちやうどそのとき、道を歩きながら、その少女のことを胸に描えいていたところだったので、ハツとした。あの薔薇ばらの薔つぼみのように愛らしい少女を、帆村に紹介しょうかいかたがた引張りだした今夜の仕儀しぎだった。それはこの場末ばすえの町にある一軒のカフェの女だった。カフェの女とは云いながら、カフェとは似合にあわぬ姫君ひめぎみのように臍へそたけた少女だった。

そのカフェは、名前をゴールデン・バットという。入口に例の雌めすだか雄おすだか解と解とらない二

匹の蝙蝠こうもりが上下になつて、ネオンサインで描き出してあつた。一寸ちよつと見たところでは、薄汚うすごい極ごくくありふれたカフェではあつたが、私は何ということなく、最初に飛びこんだ夜から気に入つたのだつた。それは一ヶ月も前のことだつたらう。そのときは私一人だつたのだが、その折のことはいはずれ話さねばならぬから、後のちに譲ゆずるとして置いて、さて――

「今夜はコンディションが悪かつたよ」と私は、半分は照れかくしに云つた。

「それでも無いさ。大いに面白かつた」

「それにもう一人、君に是非紹介したいと思つていた女も休んでいやがつてネ」

「うん、うん、君江きみえ——という女だネ」

「そうだ、君江だ。こいつと来たら、およそチェリーとは逆数ぎやくすうてき的人物じんぶつでネ」

「チェリーというのかい、あのミツ豆みたいな子は……」

「ミツ豆？ ミツ豆はどうかと思うナ」（あわれ吾わがが薔薇ばらの蕾つぼみよ）――

「え？」

「イヤ其その君江きみえというのくらい、性能すべ優れた女性じょせいはいないよ。その熱情ねつじやうといい、その魅力まへりといい、更にその能力のうりきに於ては、世界一せかいいちかも知れんぞ。生なまきているモナリザモナリザというのは、正ただにあの君江きみえのことだ」

と私は、暗がりをもつけの幸いにして、自分でも齒の浮くような饒舌をふるった。あとは二人とも、鉛のように黙つて、あの裏街の軒下を歩いていった。秋はこの場末にも既に深かった。夜の霧は、頸筋のあたりに忍びよつて、ひいやりとした唇を置いていった。

(遠い路だ——) 仰ぐと、夜空を四角に切り抜いたようなツルマキ・アパートが、あたりの低い廂をもつた長家の上に超然と聳えていた。

と、そのときだった。

「ギヤーツ」

たしかギヤーツと耳の底に響いたのだが、頭の上に、ひどい悲鳴を聞きつけた。何とてうか極度の恐怖に襲われたものに違いない叫び声だった。男か女か、それさえ判断しかねるほど、人間ばなれのした声だった。

「ほッ、この家だッ」

と帆村は大地に両足を踏んばり、洋杖をあげてアパートの三四階あたりを指した。ビールの満をひいて顔をテラテラ光らせていたモダンボーイの帆村とは異り、もうすっかりシエフアードのように敏感な帆村探偵になりきっていた。

「どこから行く、道は？」私も咄嗟とつぎにもう突っこんでゆく決心をした。

「裏口へ廻つて呉れッ。明あいてたら、しつかりせにや駄目だぞ」

「君は？」

「表から飛びこむッ。急いで——」

帆村が腰をひとひねりして、尻の隠袋かくしから拳銃を取り出しながら、早や身体を玄関の扉ドアにぶつつけてゆくのを見た。こつちも負けずに、狭い家と家との間に飛び込んだ。飛びこんだはいいが、溝板どぶいたがガタガタと鳴るのに面喰めんくらつた。

露地内ろしなの一つ角を曲ると、アパートの裏口に出た。頑丈な鉄棒つきの硝子扉ガラスドアが嵌はまつていた。そのハンドルに手をかけようとしたとき、なんだか前方の溝板の上をサツと飛び越えていった者があるように感じた。誰か壁の蔭に隠れていたような気がした。私は裏口の方は放つて置いて、その影を追い駈けた。

露地をつきぬけると、また細い路地がズツと長く三方に続いていた。私は素早く三つの道を透すかしてみたが、猫の子一匹、眼に入らなかつた。

気の迷いだつたかしら、と私はアパートの裏口へ引返した。ハンドルに手帛ハンカチを被せてグツとひねると、ガチャリと外はずれて扉は内部へ開いた。さてはと思つて、充分警戒をしな

がら、すこしずつ滑りこんだ。ところが入ってみると、上の方で大きなものの暴れるガタンガタンとひどい音だ。呻るような吠えるような声がする——。そこへ突然私の名が呼ばれた。疝かん高いが、紛れもなく帆村の声だった。

私は階段を駈けあがった。それは三階の廊下だった。薄暗い廊下の真中に、帆村は一人の男を組み敷いたところだった。

その頃、やっと部屋部屋の扉が開いて、中から人影が注意深く、こつちを覗のぞきだした。

「一体どうしたんです」

そういつて近づいたのは、このアパートの番人と名乗る五十がらみの肥こえた男だった。

寝衣ねまきの上に太い帯をしめ、向う鉢巻に、長い棒を持っていた。

「これは事件の部屋から逃げ出した男です」と帆村が落付いた口調かえに還かえって云った。

「事件というと、——事件はどの部屋です」

「あそこですよ。ホラ扉ドアの開けっぱなしになっている……」

「犯人は此奴こいつですか」

「さア、まだ何とも云えないが、あの部屋から飛び出してきて、いきなり私に切っ掛けかかったのでネ」

と帆村は一振の薄刃うすばの短刀をポケットから出してみせた。

怪漢は縛られたまま廊下に俯伏うつぶせになって転がっていたが、動こうともしない。その横をすりぬけて、私達は気懸りきがかの事件の部屋へ行ってみた。

「驚いちや、いけませんよ」帆村は一同に念を押しながら入口のスイッチをひねった。室内は急に明るくなった。一間通り越して奥まったところに八畳ほどの洋間があった。白いシーツの懸っている寝台があったが、こいつが少しねじれていた。が、ベッドの上は空っぽで、求める事件の主は、いま入った戸口に近い左側の隅っこに、大の字に伸びていた。若い長身の男だが、四角い頤あごが見えるばかりで、上の顔面は見えない。なんだか黒い布を被っているように見えたが、見るとそれが赤い血潮ちしおだった。残酷ざんこくに頭部をやられているのだ。右肩を自分の手で抑おさえているが、肩もやられているらしい傷口だった。見てみると、フワーツと脳貧血が起りそうになった。それほどむごたらしい傷口だった。

「おお、金さん。可哀想かわいそうに……」と番人は声を慄ふるわせた。「助かりますか」

「金さんというのかネ」と帆村は云った。「金さん、まだ脈が続いている。無論意識は無いがネ。至急医者だ、警察も急ぐが、それより前に医者だ」

「医者は何処が近いですか、爺さん」私は番人の腕をとった。

「医者があります。ここを向うへ三町ほど行ったところに丘田さんというのがある」

「じゃ爺さん、ちよつと一走り頼む」

「わしは、どうも……」

番人は尻込みしりごみをした。その結果、どうしても私が行かねばならなくなった。医師のところへゆくとすれば、怪我けが人の様子をよく見て行って話をせねばならないと思ったので、私は無理に気を励はげまして、血みどろの被害者の顔を改めて見直した。

「おお、これは……」

と私は駭おどろきに逢つて、とうとう声に出した。

「どうした、オイ。知り合いか」と帆村も駭おどろいて私の肩を叩いた。

「これあネ」私は彼の耳に口を寄せた。「これあ先刻さつき云つたゴールデン・バットの君江とややつこしい仲で評判の男さ」

私は医者を迎えるために、外へ飛びだした。丘田医師というのは、ゴールデン・バットの近くに診療所を持っていた。それだから私は、さつき帆村と一緒に通った道をもう一度逆に帰ってゆかねばならなかった。

その道々、私の全神経は、今見た怪我人のことで占領されていた。

金と呼ばれる彼の男の顔を覚えたのは、忘れもしない私が最初バットの門をくぐったときのことだった。沢山客もあるなかで、なぜあの男のことをハッキリ印象づけられたか。

そうそう思い出したが、まだもう一人、あのときに覚えた男がいた。その人のことを先に云うが、それは海員らしく、女たちに行っている話が如何にも面白かったので記憶に残っている。あまり大きな人ではなかったが、陽にやけた男らしい男で、その上、どの海員たちもがそうであるように、非常に性的魅力といったようなものが溢れていて、女の子にはチャホヤされそうに見えた。彼のしていた話というのは、むろん航海中の出来ごとについてだったが、中で一番私の注意を引いたものは、密輸入に関するものだった。船員の中には、陸上の悪漢団と、切っても切れぬ腐れ縁のあるものがあって、いつも密輸を強制される。密輸といつても小さい船の中であるから、たびたび繰返しては見付かってしまう。だから、

一つ又一つと苦心をして新手あらたの方法を考えなければならぬ。最近ではエドガア・ポオもどきに、密輸入品を人目につかぬ所に隠す代りに、反かえつて人目ひとめに極ごくくつきやすいところへ放り出して置くのが流行はやつていると、こんな話を面白可笑おおかしく、この海原力三うなばらりきぞうという船員が話して聞かせた。

さて例の金青年きんと来ると、身体が大きいばかりで男前がよいというのでもなく、スポーツマンらしい垢ぬあかけたところがあるのでもなく、どちらかと云えば男として美の要素の欠けた青年だった。迎むかへも海原力三などは、恋の競争などは思いもよらぬ劣勢者れつせいしやと思われるた。それがあのカフエ・ゴールデン・バットの女にもてること大變なものだった。金が入つて来ると、十人近い女は自分の持ち番の客の有る無しに係かかわらず、ドツと喚わめいて一斉に彼に飛びついてゆくという騒ぎである。それがなんとも形容しがたいような嬌きやうせい声を張りあげて、あつちからも、こつちからも金の胸にぶら下るのだ。まるで一つの麩ふを目懸けて、沢山の緋鯉真鯉ひいまいいがお互に押しのかながら飛びついてくるかのよう。

そのときに金はどんな顔をしているかというのに、一向嬉しそうにも楽しそうにも見えないのだから不思議である。唯ただ、隅つこの席へ行つてドカリと腰を下ろす。そこは彼のために、いつも取つて置きおきの場所だった。そこで彼は悠々ゆうゆうと一本の煙草を取り出す。する

とまた大騒ぎである。十人ばかりの女が誰一人のこらず、てんでに帯の間から燐寸^{マッチ}を出し、シユツと火をつける。まるで燐寸すり競争をやっているようなものだ。莫迦^{ばか}莫迦^{ばか}しくて見ていられない。

「ばか、ばか、煙草が燃えてしまいうじやないか」

そのとき金は、ほんの微^{かす}かにニコついて、煙草の火をつける。彼がフーツと煙を吹き出すと女どもは、身体を蛇のようにねじらせて、

「ねエ、ねエ」「ねえツたら、ねエ」

と鼻声をあげる。そこで金は、懐中をさぐって、卓^{テーブル}子の上へポーンと煙草の函^{はこ}を投げだす。わーツというので、女どもはその函をひたたくって（それは大^{たい}抵^{てい}、あの君江の手に入るのが例だ）、ひたたくった女が、子供に菓子を分けるように、朋^{ほう}輩^{ばい}どもの手に一本ずつ握らせてやる。貰った方では、その金青年お流れの煙草に、パツと火をつけて貪^{むさぼ}るように吸って、黄色い声をあげる。

左^さ様^{よう}に豪^{ごう}勢^{せい}な（併^{しか}し不思議な）人^し気^よを背^し負^よっている金青年の心は一体誰の上にあつたかという、それは君江の上にあつた。その君江なる女がまた愉快な女で、金^にの^{よう}女^{ぼう}房^ぜ然^んとしているかと思えば、身体に暇があると、誰彼なしに愛^{あい}嬌^{きょう}をふりまいたり、情^{なさ}

けを尽したりした。だから君江という女は、金とは又別な意味で、客たちの人気を博していた。

しかし満れば虧くるの比喩に洩れず、先頃から君江の相貌がすこし変つてきた。金青年に喰つてかかるような狂態さえ、人目についてきた。それでいて、結局最後に君江は金の機嫌を取り結ぶ——というよりも哀訴することになるのだった。

これに反して金青年の機嫌は、前から見ると少し宛よくなつて来たようであつた。それは、これまで煙草を欲しがらなかつたチエリーが、彼の訓練によつて煙草を喫いはじめたからである。

「煙草つて、仁丹みたいなものネ」

とチエリーは云つた。

「煙草は仁丹みたいなものは、よかつたネ」

と金は笑つた。女達も釣りこまれてハアハア笑いでしたが、君江だけがどうしたものか、ツと席を立つて調理部屋の方へ姿を消したつきり、いつまで経つても出てこなかつた。

——そのようなカフェ・ゴールデン・バットの帝王の如き人気者が、見るもむごたらしい兇行を受けたものだから、私は非常に驚きもしたし、一体誰にやられたのかと、普

段から知っている誰彼の顔をあれやこれやと思い巡らした。

丘田医師の家は、すぐ判った。私の長話に大変時間が経過したような気がされることであらうが、アパートを出てからここまで、正味四五分の時間だった。

電鈴を押すと、すぐに人が出て来たのは意外だった。迎えてくれたのは、三十四五の、涼しそうな髭を立てた、見るからに健かそうな和服姿の紳士だった。

「先生は？」

「イヤ、僕ですよ」

「あ、そうですか、実は……」

と私は急病人の話をして、ひどい外傷だから直ぐに来て呉れるように頼んだ。

「伺いましょう。直ぐお伴しますから、ちよつと待っていて下さい」

丘田医師は顔を緊張させたようだったが、奥へ入った。

奥へ入って仕度をしているのであらうが、直ぐという言葉とは違って、なかなか出て来なかつた。私はすこし癩にさわりながら、この医師の生活ぶりを見てやるために、玄關の隅々を睨めまわした。

そのときに、私の注意を惹いたものがあつた。私も帆村張りに、これでも観察は相当鋭

いつもりだ。とにかく第一に私は、そこに脱ぎすてられてあつた真新しい男履きの下駄の歯に眼を止めた。桐の厚い真白の歯が、殆んど三分の二以下というものは、なまなま生々しい泥で黒々と染まつていた。

それからもう一つ、ステッキ洋杖が立てかけてあつたが、近くに眼をよせて仔細に観察してみると、ぞうげ象牙でできているその石突きいしづのところと同じような生々しい泥で汚れていた。

この夜更よふけ、よふ丘田医師が直ぐ玄関へ飛び出して来たところといい、寝ぼけ眼をこすつていたわけでもなく冴さえきつた眼をしていたことといい、この下駄の泥、ステッキ洋杖の泥は、丘田医師がどんなことをしていたかすこし見当がつくように思った。私は犬のように鼻をクンクン動かして、更に周囲に注意を払つた。丘田医師のらしい男履きの下駄が並んでいるところは、セメントで固めた三和土たたきだつた。それは白い色が浮き上るほど、よく乾燥していた。しかし私は、その男下駄の側方そくほうに、ほんの僅かではあるが、少し湿つぽい部分のあるのを発見した。私は前まえ躰かたがみになると、手の甲こうをかえして拳こぶしの先で三和土の上をあちこち触れてみた。手の甲というものは、冷熱の感覚がたいへん鋭敏である。医師が打診をするときの調子で、そこらあたりをおさ圧おさえてまわつた揚句あげく、とうとう私は或る物の形を探しあてた。それはなんと、一對の踵かかとのおさ高い婦人靴の形だつた。靴から押し、足の寸法は二

十二センチ位と思われた。

婦人靴の恰好に、三和土の上が湿りを帯びていながら、そこに婦人靴が見当たらないということはどういうことを意味するのだろう。と考えたとき、奥の間で何だか女の啜り泣くような声が一と声二た声したような気がした。ハツとして思わず前身を曲げて聞き耳を立てたところへ、手間どった丘田医師が洋服に着換えてヌツと出てきたので、これには私も周章であわてた。

「どうかしましたか」と丘田医師は不機嫌に云った。

「イヤ、誰方が患者さんがおありじゃないですか」

「有りませんよ。お手伝いが齒を痛がっているのです」

そういう声は変に硬ばっていて、嘘を云っているのだということを証明しているものだった。

私達は外へ出たが、そのときは話題が、例の重傷を負うた金青年の上に移っていた。丘田医師の話では、金青年を知つてもいるし、診察もしたことがあると云っていたが、何病であるか、それは云わなかった。そして、私の熱心な問いに、時々トンチンカンな返事をしながら、しきりに足を早めるのだった。

折角せつかく駆けつけて呉れた丘田医師だったけれど、重傷の金青年きんせいねんは、私が出掛けると間もなく事切れたそうであつた。

帆村の案内で、金の屍体のところまで行つた医師は、叮嚀ていねいに死者へ敬礼をすると、懐中電灯を出して、傷の部分を診察した。

「これは何か鈍器どんきでやられたものようですネ。余程重い鈍器ですナ、頭の方よりも、左肩が随分ひどくやられていますよ。骨がボロボロに碎けています」

「そうでしょう」と帆村は応こたえてから、指を側へ向けた。「そこに凶器こつぎがありますよ」「どれです」医師は目をあげた。

「ほら、これですよ」と帆村は二三歩あるいて、床の上に転ころがっている一つの大きい毯まりのようなものを指した。「外側は御覧のとおり毛糸で編んであります。しかしこれは単なる袋

ですよ。中身は鉄の砲丸です、あの競技に使うのと同じですが、非常に重いです。こつちから御覧になると、血の附いているのが見えますよ」

帆村は横の方から凶器の一部を指し示した。

「これは頭部からの出血が染つたのですナ」と医師は云つた。

「そうらしいですネ。ときに丘田さん。この死者の致命傷は、やはりこの外傷によるものでしょうか」

「無論それに違いがありませんが、何か御意見でも……」

「意見というほどのものではありませんが、この死者の身体を見ますと、普通の人には見られない特異性があるように思ふんです。例えば、中毒症といったようなものです」

「そうです、そうです」医師はしきりに同感の意を表して云つた。

「そう仰おっしゃ有れば申上げてしましますが、実はこの金さんはモルヒネぎい剤ざいの中毒患者ですよ」

「ほほう、貴方のところへ、治療を求めに参りましたか」

「そうなんです。実はこの四五日かたこの方かたですがネ」

「今日も御覧になりましたか」

「今朝診みましたよ。大分ひどいのです。普通人の極きよくりよう量の四倍ぐらいやらないと利かな

いのですからネ」

「四倍ですか、成程。——」

帆村はケースから一本の巻煙草を引張りだすと、カチリとライターで火をつけた。そしてそれつきり黙りこくって、ただ無闇に紫の煙を吹いた。それは彼がなにか大いに考えるべきものに突き当たったときの習慣だった。

そのとき、大通りの方から、けたたましい自動車の警笛けいてきが入り乱れて聞えてきた。それはアパートの前まで来ると、どうやら停った様子だった。間もなく階段をのぼるドヤドヤという物音がして、この事件を聞きつたえた警視庁の係官や判検事の一行が到着したのだった。

「やあー」

「やあ、先程はお報せしらを……」

大江山捜査課長は、この事件を帆村から報せて貰もらったことに礼を述べた。

「ときにどうです、被害者の容態は」

「間もなく絶命ぜつめいしましたよ。とうとう一言も口を利きませんでした。……午前零時三十分でしたがネ」

「ほう、そうですか。これが金という男ですか。やあ、これはひどい」

「現場げんじょうはすべて事件直後のとおりにしてありますから」

「いや有難う」

係官たちは、現場がすこしも荒されずに保存されたことについて、帆村に感謝したのだ。帆村は私を促うながして、別室へ移った。これは係官の調べを済ます間、邪魔をしないためだった。

同じような部屋割りの隣室りんしつだった、椅子もないので、私達はベッドの上に腰を下した。ここに暫しばらくの時間があるが、この間に帆村とうまく連絡を取っておかねばならない。

「どうだ、犯人は何か喋しゃべったかい」

と、帆村がホープに火を点けるのを待つて尋ねてみた。

「いや君、あの男はまだ犯人とは決つっていないよ」

「だってあの男は、事件の室から出て来たのだろう。そして薄刃うすばの短刀をもって君に切り懸かつたのじゃないか」

「うん、だがあの短刀にはまだ一滴の血もついていないのだ」

「すると、あの袋入の砲丸でやつつけたのだろう。あの大きな男にはやれそうな手段じゃ

ないか」

「それもまだ解らない」

「君はあの男に、まだそれを訊きいてみないのかい」

「うん、あの男とは其その後ご一ひと言ことも口を利いていないんだ」

犯人と思われるあの男に、まだ一言半句の訊問じんもんもしてないという帆村の言葉に、私は驚いてしまった。

「じゃ今まで君は、一体何をしていたのかネ」

「金の部屋について調べていたのだ」

「そして何を掴つかんだのかい」

「いろいろと面白いものを掴んだ。しかし短刀をもった男を犯人と決めるに十分な証拠はまだ集まらない」

「というと、どんなものを」

帆村は嘸のみこんだ煙を、喉の奥でコロコロまわしているようだったが、やがて細い煙の糸にして静かに口から吐きだした。それは彼が何か解とき難がたい謎を発見し、解く前の楽しさに酔っているような場合に限って、必ずやって見せる一つの芸げい当とうだった。

「あの部屋で面白いことを見つけたがネ」と帆村はボツボツ語りだした。「それはゴールデン・バットについてなのだ。君はあすこの床の上に、バットがバラバラこぼ滾れているのに気がつかなかったかい」

「そういえば、五六本、ころ転がっているようだネ」

「五六本じゃないよ。本当は皆で三十二本もあるんだ。といってこれが、五十本も入るシガレット・ケースから転げ出したのじゃないのだよ。そんなケースなんて一つもあの部屋には無いのだ。あるのはバットの、あのおなじみ馴染の空箱からぼこだけだった。空箱の数はみんなで四個あつたがネ」

「ほほう」

「それからもつと面白いことがある。あの部屋には灰皿が三つもあるんだが、さて其その灰皿の中に大変な特徴がある」

「というところ……」

「灰皿の中に、マツチ燐寸の軸と煙草の灰が入っているのに不思議はないが、もう一つ必ず有りそうでいてあの灰皿には見当らないものがあるのだ」と帆村は云ってちよつと口をつぐ噤んだ。「それは何かというすいと吸殻が一つも転っていないのだ。灰の分量から考えると、すくな

くとも十五六個の吸殻すいがらがある筈と思うのだが、一個も見当らないのだ。これは大変面白いことだ」

私には何のことだか見当がつかなかった。

「煙草について、まだ発見したことがある。それは床の上に転がっている三十二本のうち、汚れないのが二十五本で、残りの七本は踏みつけられたものと見え、ペチャンコになっていた。それを調べてみると、ハッキリ靴の裏型がついているから、これは靴で踏みつけられたものと見てよい。しかし靴は、普通ならばあの部屋の入口で脱いで上るようになってくる。しかるにこの踏みつけられた七本のバットから考えると、誰か靴を入口で脱がないで、その儘まま、上へ上った者がいたという説明になるわけだ」

「それが例の短刀をもった男じやないのかネ」

「そうかも知れない。そうかも知れないが、何しろバットの上につけられた靴の跡のことだ。小さい面積のことだから、ハッキリどんな形の、どんな寸法の靴だとまでは云えないのだ」

「なるほど」

「そこで僕は、君に一つ質問があるが」と帆村はまた一本のホープに火を点けて云ったの

である。「事件の最初、君がアパートの裏口へ廻ったときに、露地ろじに何か人影のようなものを見懸みかけたといったが、あれは男だったか、それとも女だったか、解らなかつたかネ」

「さあ、どつちとも解らないネ」

「解らない。解らなければ、それでもいいとして、僕はあの部屋に事件の前後に居たものと思われるもう一人の人物を知っているのだ」

「それは誰のことだい」

「それは女である。しかも若い女である」と帆村は仰おほ々ごうごうしく云った。

「どうしてそれが判つたのかい」

「それはベッドの上に枕があつたが、探してみるとベッドの下にもう一つの枕が転がっていて、これには婦人の毛髪がついていた。それだけではない。卓テーブル子の上に半開きになつたコンパクトが発見された。白い粉がその卓子の上に滾こぼれていた。粉の形と、コンパクトをどけてみた跡の形とから、コンパクトの主があれを卓子の上に置いたのは、相当生なまなま々しい時間の出来ごとだと推定される。——それでさつき僕のした質問の目的が解つたことだろうと思うが、或いは君が、その若い女を見かけやしなかつたのかと考えたのだ」

「待つてくれ、そう云えば……」

とそこで私は、丘田医師の家で、腹たち紛れに観察した女靴の跡のことや、丘田医師のことについて報告した。

「もしや金の部屋に寝ていたらしい若い女というのは、丘田氏のところにあつた靴跡の女ではないのかネ」

「それは独断どくだんすぎると思うネ。しかし丘田氏のところ^にいた女が、洋装をしていることが判つたのはいいことだ」

「しかし君の云う隣りの室に寝ていた若い女は、直接犯行に關係があるのかい」

「そこに実は迷つている」と帆村は煙草をスパスせいきゆうパせいきゆう性に急せいきゆうに吸つた。「その女が犯人らしいところもあると思う。そいつは踏みつけられたゴールデン・バットから考える。女はあのベッドの上に、金と寝ていた位だ。だから靴は脱いでいたものと思う。僕には意味が解らないが、状況から云つて女は兇行後、あのバットを箱から出して撒まいたのだ。だから注意をしてバットを踏ふまずに外に出ることができた。そのあとで短刀をもつた男がちんにゆ闖ちん入いしたが、バットが滾こぼれていることには気付かないもんだから、踏みつけてしまったものと考えられる」

「しかしそれは、あの短刀の男が、箱から出したとしても理屈がつくじやないか」

「それは別に構わない。あの男は元々怪しい節があるのだから、煙草の上の嫌疑が加わっても捜索には大して困らないのだ。なぜかといえば、あの砲丸を金の肩に投げつけるだけの力は、あの男には十分にあると認められるし、それからまた現にあの部屋から出てきたのを見られている。しかし犯人が若い女の方だとすると、煙草は可也重要な証拠になると思う。金が目醒めている間には、あんなに煙草を撒き散すことは出来ない。男は相当抵抗の末重傷を加えられたと認められるから、そうなるかとバットが踏みつけられることなしに満足に転がっている筈がない。そうかと云つて男がベッドに睡っている間にあの煙草を撒いたのでもない。其は男がベッドから遠く離れたところで重傷しているので解る。ベッド以外に男が睡つていられるところなんてあるものじゃない。どうしてもあの煙草は、男に兇行を加えた上で撒いたものに違いないとなるんじゃないか。もう一つ砲丸を擲げることは、どの若い女にも出来るという絶対の芸当ではないのだ。それとも君は、脆弱い女性にあの砲丸を相手の肩へ投げつけることが出来る場合を想像できるかネ」

「さあそれは、まず出来ないと思うネ。その女が気が変にでもなつて、馬鹿力というのを出すのでも無ければネ」

「気が変に？　気が変だとすれば、あの場をあんなに巧みに逃げられるだろうか」

「ないこともないぞ」と私は負けるのが厭いやであるから叫んだ。「こういう場合だ、気が変になった女が、金に重傷を負わした。途端なほに癒なつたとすると……」

「もう止よそう。はッはッはッ」と、帆村は呆あきれ顔がに笑い出した。

「帆村君、ちよつと来て下さらんか」

室の外から、大江山捜査課長の呼ぶ声こゑがした。どうやら隣りの調べも片かたがついたものらしかった。

4

金青年きんせい殺害事件は案外あつ呆あ気なく処理されてしまった。官辺かんべんでは、帆村が捕縛ほぼくした例の男を犯人として判定してしまった。

ここに意外だったことは、あの犯人という男が、海原うなばら力三りきぞうその人だったことだ。私もあの後、係官の前へ彼が引張りだされたとき初めてそれと気が付いて駭おどろいてしまったわ

けだった。

海原力三は最初のうちは猛烈に頑張つて、犯人でないと言いつ張つた。しかし後に至つて遂に係官の指摘したとおり、一切の犯行を認めたということであつた。

犯行の動機は、カフェ・ゴールデン・バットで金のために女を奪われたことを極度に憤慨したためだった。彼の抱いていった薄刃の短刀に血を舐らず、あの重い砲丸を投げつけて目的を達したことは、後に捕縛されたとしても、短刀をまだ使っていないという点で、犯行を否定するつもりだったという。それを最初から指摘したところの検事は、大変鼻を高くしていた。

かくて事件は表面的には解決したが、私としてはお察しのとおり、いろいろの疑問が不可解のまま解決されていないので、大いに不満だった。

そして思いは帆村の場合も同じであつた。その帆村は、海原力三の自白後、随分しばらくやつて来なかつたが、そうそう、あれは一ヶ月ほども経つた後のことだつたらうか、莫迦にいい機嫌で私の許へ訪ねてきた。

「オイ何処へ行つてたのか」

と私は帆村の鬚を剃つたあとの青々とした顔を見上げて云つた。

「うん、東京にいるのが嫌いやになって、旅に出ていた。実は神戸こうべの辺をブラブラしていたというわけさ。あっちの方は六甲ろっこうといい、有馬ありまといい、舞子明石まいこあかしといい、全くいいところだネ」

「ほう、そうか。じゃ誘いざなってくれりやいいものをサ」

「ところがブラブラしていたとはいいながら、波止場仲仕はとばなかしをやっていたんだぜ」

「波止場仲仕を、か？」

私は直ぐ帆村の意図いとが呑みこめた。彼は例の事件について、外国汽船の出入はげしい港で何事かを調べていたというわけなのだろう。

「ときに君は、近頃ゴールデン・バットへ行っているかい」

「行つてはいるがネ」

「行つてはいるがネというところでは、あまり成功していないようだネ。あすこも金だの海原氏が一時に行かなくなつて、寂しくなつたことだろう」

「その代り大した後任者が詰めかけているよ」

「そりゃ誰のことだい」

「君には解わかっているのだろう。あの丘田医師のことさ」

「そうか。丘田氏が行っているか。相手はどの女だい」

「それが例のチェリーなんだ。チェリーはこの頃、断然だんぜんナンバー・ワンだよ。君江も居るには居るが昔せきじつ日の倂おも無かしき。しかし温和おとなしくなつた。温和しいといえ、あの事件からこつち、不思議に誰も彼もが温和しくなつたぞ。あれから思うと金という男は、悪魔のようなどころのある素晴らしい天才だつたんだナ」

「煙草の方は相変らず皆でやっているかい」

「煙草というと……」と私はあまり唐突とうとつなので直ぐには気がつかなかつた。「ああ煙草のことかい。それならカフエ・ゴールデン・バットのことだ。看板どおりのものを忠実に愛用しているさ。うまい宣伝手段もあつたもんだネ。そういえば近来、女ども、バットをてんでにケースに入れていてネ、それを揃いも揃つてパイプに挿はさんでプカプカふかすのだ。他にはちよつと見られない風景だネ」

「ふーん、なるほど」そこで帆村は言葉を切つて、彼の好きなホープを矢鱈やたらにふかし始めた。

「じゃ一つ——」とやがて彼は立ち上つて云つた。「今晚は久しぶりにバットへ一緒に連れていって貰うとして、その前に君にちよつと付き合ってもらいたいところがあるんだが」

そこで私は帆村について家を出掛けたのだった。

「最初はここだよ」

と彼は云つて、バットの近所にある野間薬局の店先みせさきにずかずか入つていった。

「ちよつと劇薬げきやく売買簿ばいばいぼを見せて貰いたいのですがネ。ここに本庁からの命令書がありませんが……」

そういつて帆村は店先に腰を下した。顔の青白い主人が奥から出てきて、こつちを向いて叮嚀ていねいに挨拶をすると、薬瓶の沢山並んだ部屋から、大きな帳簿をもって来た。帆村がそれを開いたのを見ると、細い罫線こまかけいせんが沢山引いてあつて、そこに細い数字が書き込んであつた。

そこで彼は、丘田医師の欄を拵げて、古い日附のところから、その細い売買数量を丹念に別紙へ筆写しはじめた。

外へ出ると、帆村はどんどん先に歩いて丘田医師の玄関に立った。案内を乞うと、太つたお手伝いさんが出て来たが、丘田氏は幸い在宅ざいたくとのことだった。私は何ヶ月振りかにも、その応接室に通つた。

「いや中々結構な住居すまいだネ」と帆村は大いに興きようがった。そこへ丘田医師があらわれた。

「やあ其の後は——」と帆村は馴々しく挨拶をした後で直ぐ云った。「今日は本庁の臨時雇というところでした、ちよつと先生のところの劇薬の在庫数量を拝見に参りましたか」

「なに劇薬の在庫数量ですか。それは又珍らしい検査ですネ」そういう丘田医師の態度には、すこしの狼狽のあともなかった。「じゃ向うの調剤室までお出でを願ひましょうか」帆村は私を促して診察室を出た。調剤室はすこし離れた玄関脇にあつた。その中へ入ると、プーンと痛そうなくすりの匂いが鼻をうった。三方の高い壁には、十四五段もありそうな棚が重つていて、それに大小とりどりの薬壇が、いろいろのレットルをつけてギツシリ並んでいた。

劇薬は一隅に設けられた戸棚の中に嚴重に保管されてあつた。丘田医師は鍵を外して、ガラガラとその扉を開くと、黒いレットルや赤いレットルの貼つてある小形の壇が、気味のわるい圧力を私達の上になげつけた。

帆村は隅から一つずつ、その小さい壇を下すと、蓋のあるものは蓋をとり、中身を小さい匙の上に掬いとつてみたり、天秤の上に白紙を置いてその上に壇の内容全部をとりだして測つたり、また封の切つてないものは封緘を綿密に検べたり、なかなか念の入つた

検^{しら}べ方^{かた}だった。始めは感心していたものの、私はだんだん飽^あきてきた。その退屈^{くつ}さから脱^{のが}れるために、何か面白いものでもないかと調剤室の中をズツと見廻した。

しかし別にこれぞという異^{こと}な^なった品物も見当らなかつた。唯一つ、背の低い私にはちよつと手の届きかねる高い棚の上に、直径が七八センチもあろうと思われる大きい銀^{ぎん}玉^{だま}が載^のつていた、その銀玉は、黒縮^{くろちりめん}緬^{めん}らしい厚い座布^{ざふ}団^{だん}を敷いて鈍^{にぶ}い光を放^はつていた。どうやら煙草の錫^{すずはく}箔^{はく}を丹念^{たんねん}に溜^ためて、それを丸めて作りあげたものらしかつた。いくら煙草ずきの人でも、これだけの大きさの銀玉を作るには少くとも三四年は懸^かる^かだろうと思われた。私はあとで丘田医師に訊^{たず}ねてみようと思つて、なおもその銀玉を見つめていたのであるが、そのとき妙なものに気がついた。それは銀玉の上から三分の二ぐらいのところ、横に一本細い線が入^いつて^いることだつた。よくよく見るとそれは線というよりも切れ目のように思われた。

(オヤオヤ、この銀玉はインチキかな)

そう思つて私は手を伸^のし^ばかけたとき、いきなり私の洋服をグツと引張つたものがある。はツと思つて見廻わすと、引張つたのは、紛^{まぎ}れもなく帆村^{ふくむら}だつた。丘田医師は、脚^き立^だつ^つの上にあがつて、毒劇薬の壘^うをセツセと下^{くだ}して^いて、それは余りに遠方に居たから、私の洋

服を引張つたのは帆村の外には無い。

——とにかく私は気がついて、銀玉を見ることを停めてしまった。

「もう、その辺でいいですよ」帆村は丘田医師に声をかけた。

「もういいですか」

「そこで鳥渡ちよつとお尋ねいたしますが」といつて帆村は鉛筆で数字を書き入れていた紙片を取上げて丘田氏に云つた。「パントポンの現在高が、すこし合いませんネ」

パントポンというのはモルヒネ剤であるが精製した上等のものだった。

「そんなことは無いでしょう。よく調べて下さい」

「いや確かに合いませんよ。警察の方に報告されている野間薬局売りの数量と合わんですよ」

「そりや変ですネ。少いということは無い筈はずなんですがネ」丘田医師の眼は自信あり気に光っていた。

「そうです。少くはないのです。少いのはまだ始末がいいと思うんですが、現在高が非常に多すぎる……」

「多すぎるのは、いいじゃないですか」

「困るんですよ」と帆村はパントポンの壇に「いちべつ」を送りながら云った。「なにか他のモルヒネ剤で間に合わせたために、パントポンの数量が残っているのじゃありませんか。例えばヘロインとか……」

「ヘロインですって、ヘロインみたいな粗悪なやつは私のところでは使っていませんよ」
「ではこの儘ままにして置きましょう。もう外に無いでしょうネ」

「ありませんとも」そういった丘田医師の顔は、心持ち蒼あおかった。

「では一つ、投薬簿とうやくぼの方を見せて下さいませんか」

「投薬簿ですか。そうです、あれは向うの室にあるから取ってきましょう」

そういつて丘田医師は立った、帆村は私に跟ついてゆくようにと、目で合図をした。

丘田医師は不機嫌に診察室へ飛びこんだ。そしてチエツと舌打したうちをしたが、そのとき後からついていった私が扉ドアに当ってガタリと音を立てたものだから、彼は吃驚びっくりして私の方を振りかえった。その面は、明かに不安の色が濃く浮んでいた。

投薬簿は直ぐ見付かった。調薬室へ引返してみると、帆村は前とはすこしも違わぬ位置で、また別の劇薬の目方を測っていた。

「さアこれが投薬簿です。――」

帆村は帳面をとりあげると、念入りに一頁二頁と見ていった。丘田医師は次第に苛々いらいらしている様子だった。そのうちに帆村は、投葉簿をパタリと閉じた。

「どうも有難うございました」

「もういいのですか」

「ええ、もう用は済みました。この位で引揚げさしていただきましょう」

帆村はうしろを向いて、そこにあつた大理石の手洗に手を差出して、水道の栓をひねつた。冷たそうな水がジャーツと帆村の手に懸った。

5

外へ出ると、もう街はとつぷり暮れていた。快い微風こころよが、どこからともなく追駈けてきて、頤あごのあたりを擦くすくるように撫でていった。

私たちは橋の上に来た。その橋を渡れば、すぐカフェ・ゴールデンバットの入口があつ

た。

このとき帆村は、ツカツカと橋の欄干らんかんの方へ近づいていった。そこで彼はポケットを探っているようであったが、キラメルの函はこ二つ位の大きさの白い紙包みを取り出した。どうするのかと見てみると、呀あツという間もなく、その紙包みは帆村の手を離れて、川の水面に落ちていった。帆村はパタパタと両方の掌てのひらを打ち合わせて、なにかをしきりに払っていた。

その夜のカフェ・ゴールデン・バットは宵よいの口だというのに、もう大入満員だった。私達はやっと片隅に小さい卓子テーブルを見付けることが出来た。

「ああら、いらつしやい」

そういつて通りすぎたのは、チェリーだった。カクテルの盃を高くさき上げて、急ぎ足に通りすぎた。背後うしろから眺めるとワン・ピースが、はちきれそうにひきしまつて、彼女の肉体があらわに透すいて見えそうだった。

「ありやチェリーさんだネ」

「うん」

「暫く見ない間に、大変肉づきが発達したじゃないか。まるで別人のようだ」

「そうだね」私は或ることを思い浮かべて、胸の締めつけられるのを覚えた。

「まあ、いらつしやいませ」そこへ君江がやって来た。「先刻はどうも……」

君江が帆村にそういつて挨拶をした。オヤオヤと思つて私は帆村の顔を見た。

「む——」帆村は白つぱくれて、ホープの煙幕の蔭に隠れていた。

注文をきいて、君江が向うへゆくのを待ちかねて私は口を切った。

「今のはどういう訳なんだ、『先刻はどうも』というのは」

帆村はニヤリと笑つて、灰皿に短くなつたホープを突きこんだ。

「君は覚えているだろう」と彼は声を墜として云つた。「あの金という惨死青年が或る中

毒に罹つていたことを」

「ひどいモルヒネ中毒だというんだろう」

「そうだ。屍体解剖の結果、それは十分に証明されたが、しかしあのモルヒネ中毒は彼の直接死因でないことが証明された」

帆村は、そこで又一本のホープを摘みあげた。

「ところが、あの金が如何なる手段でモヒを用いていたか、それについては一向解らなかつたのだ。僕はそれを解くのに大分苦心をして、とうとう神戸へ出掛けるようなことにな

ったのだ。しかし僕は遂にその手段を見つけることが出来た。発見のヒントは、金の部屋を探したときに掴んだものだった。それは灰皿の内容物からだった」

「うむ」

「あのとき、君も知っているだろうが、灰皿の中には、燐寸の燃え屑と、煙草の灰ばかりがあつて、煙草の吸殻が一つも見当らなかつたことを。あれが最初のヒントなのだ。およそ吸殻のない吸い方をするということは、普通の吸い方ではない。それは愛煙家のうちでも、最も特異な吸い方なのだ。火のついた巻煙草がだんだんと短くなつてお仕舞いになると脂くさくなる。これは決して美味いところではない。それを大事に最後まで吸いつくすところに、僕は疑問を挟んだのだ。——そこで僕は、或る一つの仮定を置いた。仮定を置いただけでは十分ではない。僕はその仮定を確めるために、神戸の波止場で仲仕を働しながら、不思議な秘密の楽しみをもっている人達の中を探しまわつたのだ。そして遂に私の仮定が、或る程度まで正鵠を射ていることを確めた。しかしその上で、尚實際的証人を得る必要があつたのだ。それで僕は急遽東京へ引返した。そして第一番に逢つて話をしたのがあの君江なのだ」

帆村はそこでまたホープを甘そうに喫つた。

「君江というと、彼女は金の情婦じょうぶとして有名だった時代がある。私は一本釘くぎをさして置いた上で尋ねてみた。『君はあのうまい煙草の作り方を、死んだ金から教わったのだろう』と」

「なに、うまい煙草というと？」

「そうなのだ。甘い煙草うまいのことを訊かれて彼女はハツと顔色をかえたが、もう仕方がないのだ。先にさして置いた私の釘は、どうしても彼女の告白を期待していいことになっていったのだ。『ええ、そうですわ』と遂に君江は答えた。そこで私は云った。『煙草にあの白い粉こなぐすり薬を載せて火を点ける。それでいいのだろう』君江は黙って肯いた」

「そりや、どういうわけだい」

「なーに、これはあの劇薬げきやくを煙草に浸ませて喫う方法なのだよ。鴉片中毒者はモヒ剤だけを吸うが、われわれの場合は、ほんの僅かのモヒ剤を煙草に交ませて吸うのだよ」

「その方法は？」

「それは詳しく云うことを憚はばるがネ、とにかくその薬の入った巻煙草——あの場合ではゴールデン・バットだが、そのバットの切口きりぐちのところは、一度火を点けて直ぐ消したようになっているのだ。金のやつは、こうした仕掛けのある煙草を吸っていた」

「そりや、うまいのだらうか」

「モルヒネ剤特有の蠱惑こわくにみちた快味かいきがあるというわけさ。ところが金という男は頭がよかつたと見えて、それを自分だけに止めず、ゴールデン・バットの女たちに秘ひそかに喫くわせただ。女たちは、真逆まぎかそんな仕掛けのある煙草とは知らず、つい喫くってしまったが、大変いい気持になれた。それでうかうか何本も貰もらって喫くっているうちに、とうとうモヒ中毒に懸かかってしまった。さアそうなると、今度はどうしても喫くまなければ苦しくてならない。仕舞しまいには、あの仕掛けのある煙草のこゝろを感じたのだらうが、そのときはどうにもならないところへ達たしていた。女たちは金に殺ころして、そのゴールデン・バットを強要きやうした。金としては思おもう壺つぼだつたらう。バット一本の懸かけ引きで、気に入いつた女たちを自由に奔ほん弄ろうしていったのだ」

「そうだったか——」私は深い嘆息たんそくと共に、あの死んだ金が素晴らしくもてていた其の頃の情景をハッキリ思い出した。

「これは君江から、すっかり訊きいてしまったことなのだよ。君江が一時、狂暴きやうぼうになったことがあつたネ。あれは金が寵ちやうあい愛あいをチェリーに移し始めた頃だつたんだ。君江はそれを愚ぐずぐず図ず愚ぐずぐず云ぐつたものだから、金は怒おこつて、それじゃお前には今までのように薬をやらない

ぞといつて、薬の制限で君江を黙らせようとしたのだ。君江は他の女よりすこし分量を多く貰っていた。それは金が彼女を強烈に興奮させて置いて、自分の慾情を唆ろうとしたためだった。ところがその分量を減らされたために、君江はああして金に喰ってかかったのだ」

「ああ、するともしや……」と私は口に出しかけたが、気をかえて、「一体あのモヒ剤はどこから金が入っていたのかい」

「それが問題だったが、これも神戸で調べあげた。あれは某方面から密輸入をしたヘロインだったんだ。金はそれを手に入れたときに、あの用い方も一緒に教わったものらしい」
 「では、相当貯蔵していたんだネ。でも金の部屋から、そんなものが出て来た話を聞かなかつたじゃないか」

「そうだ。そこに面白い問題があるんだよ」と帆村はいかにも愉快そうに微笑んだ。「いまにだんだん判ってくるから」

そこへ君江がビールを搬んできた。

「どうも済みません。今夜は御覧のとおりの大入で、うまく廻らないんですよ。まあどうでしょう。こんなに忙しいことは、このゴールデン・バットが出来て初めてのことなの

よ」そういつて君江は、白い指を顚顚こめかみにあてた。

「君たちのサービスが良すぎるせいだろう」と帆村は挪揄からかった。

「どうぞですか——」と、君江はビール壘コップをとりあげて、帆村の洋盃コップに白い泡を注ぎこんだ。

丁度ちやうどそのとき、入口に置いた棕櫚しゆろの葉蔭から、一人の男がこつちを覗のぞいたように思っ

た。チラと見たばかりで誰とも最初は思い出せなかったが、そのうち君江のところへ来た初顔はつがほの女が、

「オーさんよ」

と小さい声で云ったのが聞えた。それで丘田医師が、このゴールデン・バットへ繰くりこんで来たことに気がついた。

6

どうしたというものか、それから毎晩のように帆村が私のところへやってきた。やつ

てきては、毎晩はこんで押したように、私を誘ってゴールデン・バットへ出掛けた。

そんなことが、およそ一週間も続いたのちのことだった。その晩も帆村と私とは、ゴールデン・バットのボックスに身体を埋めていた。その日はいつもとは違い、カフェの中にはなんとなく変な空気が漂っていることに気がついたが、しかしその夜のうちに、あの愛慾の大殿堂だいでんどうゴールデン・バットがピタリと大戸を閉じてしまうなどとは夢にも気がつかなかった。実にこれが有名なる「ゴールデン・バット事件」の当夜とうやなのだった。

「どうも解らないことがあるのだがネ」と神ならぬ私は呑気のんきな口調で帆村に呼びかけていた。「君の話では、金という男は、この女たちに、劇薬を浸しみこませた煙草を与えてモルヒネ中毒者にしていたということだが、金が死んでしまった今こんにち日も、彼女たちは別に中毒者らしい顔もしないで平気でいるのは、ちよつと訳が解らないネ」

「なるほど。それでどうだというのだ」

「どうだといって、彼女たちは金からモルヒネ剤の供給を断られたわけだから、大なり小なり、中毒症状をあらわして狂暴になったり、痙攣けいれんが起つたりする筈だと思ふんだ。ところが案外みんな平気なのはどういふわけだろうか」

「いや、君の探偵眼も近頃大いに発達してきたのに敬服する」と帆村は真面目な顔付にな

つていった。「しかしその回答は、まだ僕の口からは出来ないのだ。まあ、もう少し待っていたまえ」

そこへ珍らしく私達の番のチェリーが、洋酒の盃をもつて来た。彼女は黙々として、ウイスキーを私達の前に並べたが、

「あの、ちよつと、顔を貸して下さらない」と私に言った。

「えッ」

「ちよつと話があるのよオ」

私は顔が赭あかくなつた。私の眼の前には、チェリーの真白なムチムチ肥えた露あわな二の腕が、それ自身一つの生物せいぶつのように蠢しゅんどう動していた。

「いいから、行つてこいよ」帆村は云つた。

「じゃ、ちよつと——」

私は心臓をはずませて、席を立つた。彼女の悩なやましい体たい臭しゆうの影にぴったりとついて行くと、チェリーは楽手がくしゆのいないピアノの側へつれていった。

「用て、なんだい」私は訊きいた。

「解つてるでしょう——」そういうチェリーの顔には、何となく険けん悪あくな気がみなぎつて

いるのを発見した。

「あんた、早く返さないと悪いわよ」

彼女は私の思いがけないことを云った。

「早く返せ。な、なにをだい？」

「白っぽくなるなんて、男らしくないわよ」

「なッなんだって？」

「こうなりやハツキリ云ったげるわよ。——あんた先に丘田さんのところで、盗んでいったものがあるでしょう」

「なにを云うんだ」私は駭きと怒り^{おどろ}とで思わず大声になった。

「ほら、やましいから、赤くなつたじやないの。悪いことは云わないから、これから直ぐ^す帰って、あの薬をあたしとところへ持っていらつしやい。いいこと。あたしから丘田さんにうまく謝^{あやま}って置いてあげますからネ」

薬といわれて、私はすこし気がついた。

「よし、考えとくよ」

「考えとくじやないわよ。早くしないと困るのよ」

「まあいいよ。すこし考えさせろよ」

「あんたお金のことを云っているのネ。すこし位のお金なら、あたしからあげてもいいわ」

「莫迦ばかなことを……」

そういつて私は席に戻った。帆村はホープの煙を濛もう々と立ち昇らせながら、眼をクルクルさせていた。

「どうした」

そこで私は思いがけないチェリーの云いがかりについて、彼に報告した。そのあとに私はつけたして云った。

「薬を盗んだというが、それなら君に云いそうなものじゃないか」

「うん。そりや君のことさ。だから僕があのと袖を引いて注意をしてやったじゃないか」
そこで私は、帆村が袖を引張ったことを思いだした。そうだ、あるとき私は、銀玉に見み惚とれていた。横に細い溝みぞのある銀玉だった。ああ、そうすると……あの銀玉に薬が入っていたのだ。

その瞬間だった。バラバラと私達の卓テーブル子に飛びついて来た人間があった。

「やい泥棒」いきなり卓テーブル子越ごしに顔をつきだした其その男は、なんと丘田医師だったので

ある。丘田医師には違いないが、日頃の彼の温良なる風貌はなく、髪は逆立ち、顔面は蒼そ白うはくとなり、眼は血走り、ヌツとつき出した細い腕はワナワナと慄ふるえていた。

「さあ返せ、返せといったら返さないか」私は腰をあげた。

「畜生、黙っているのは、返さない心算つもりだな。よオし、殺しちまうぞ」

そう唳どな鳴ると丘田医師は忽たちまち身を翻ひるがえして、傍そばの棕櫚しゆろの鉢植はちうえに手をかけた。彼の細腕は、五十キロもあろうと思われるその重い鉢植を軽々ともちあげて、頭上にふりかぶろうという氣勢を示した。

「危い。逃げるツ」

と帆村が私の腕を引張った。私はパツと身をかわすと、夢中になって駆けだした。なんだか背後うしろで、ガンという物の壊こわれる物凄こわい音を聞いたが、多分それは丘田医師の手を放れた鉢植が粉々に砕くだけ散ちった音だろうと思う。

* * *

帆村と私とは、やつと流し円タクを拾ってその中に転げこんだ。

「いやどうも駭おどろいた——」私はまだ慄ふるえが停とどまらなかった。

「あれでいいんだ」と帆村は呑気のんきなことを云った。「あれで筋書どおりに搬はこんだわけだ」

「筋書って、君はあのような場面を予期していたのかネ」と私は呆れて問いかえした。

「そうなんだが、あんなに巧くゆくとは思っていなかった。ここで一つ君に頭を下げた置かねばならぬことがあるが……」と彼はちよつと語を切つて「君がいつか金青年の殺人犯人のことで、『犯人は気が変だ。それが馬鹿力を出して金を殺し、その直後に正気に立ちかえつて逃走した』というような意味のことを云つたが、あれに対して僕は男らしく頭を下げるよ」

「というと……」

「あの丘田医師の大変な力のことを云っているのだ。気が変になつたればこそ、あのような力が出る」

「すると金青年に重い砲丸を擲つけて重傷を負わせたのは、丘田医師だったのかい」

「もうすこしすれば、誰が犯人か、自然に解る筈だよ」

真犯人のことを知つたのは、それから三日のちのことだった。ゴールデン・バットのチエリー——それが真犯人だった。

これは一部の人に大変奇異な思いをいだかせた。何故ならば、どうしてチエリーのよう
に脆弱い女性が、あの重い砲丸を金青年の肩の上に擲げつけることが出来たろうかという

疑問が第一。それから彼女に真逆金まさかを殺すだけの十分な動機が見つかりそうもないという疑問がその第二だった。

しかしそれは、彼女達の告白によつて、すべてが明あきらかになった。私は今、彼女達という複数の言葉を使ったが、あのゴールデン・バットの女たちは、あの晩の騒ぎをキツカケとして、去つていったのだった。彼女たちは、洋酒を盆の上に載せる代りに、みんなが白いベッドの上に載せられていた。それは某内科の病室に収容せられた風景だった。

チェリーはベッドの上から、切れ切れに一切を予審判事よしんはんじに告白した。

金が重傷をうけたあの頃は、チェリーが君江よりも一歩進んだ、金の寵愛ちようあいを得ているときだった。金は前にも云つたように、魔薬まやくの入つた煙草でもつて女たちを自由にしていた。その資本は、金が秘蔵していた一袋のヘロインというモルヒネ剤だった。

ところがこの大切な資本が、或る日金の部屋から見えなくなったのだ。それは大事件だった。命に関する出来ごとだった。彼は気が変になつたように部屋の中を探したが、どうしても出て来なかつた。そのうちにだんだんと中毒症状が出てきたので彼はかねて懸りかかつけの丘田医師をよんで、投薬とうやくを頼んだ。それから以来というものは、一日に何回となく丘田医師のもとに哀訴あいそを繰り返さねばならなかつた。ただ然ししか中毒者のことであるから、

服薬したあとの数時間は、普通と異ことならぬ爽快な気分が暮らすことが出来た。

しかしここに困ったことが出来た。それは金が予かねて魔薬まやく入りのゴールデン・バットをバラ撒まいていた女たちに与えるものがなくなつたことだつた。女たちの中でも、一番恐おそろしい苦悩おそに襲おそわれたものは、実にチエリーだつた。チエリーはその頃、金の寵ちよう愛あいを集めていただけに、服薬量が大変多量にのぼつていた。だからチエリーは金を訪ねて、ヘロインをせびつたのだつた。

しかし金にとつて、もういくらも貯たくわえのないヘロイン入りのゴールデン・バットだつた。ひとに与えれば、忽ち自分が地獄のような苦悶に転げまわらねばならない。だから最愛の情人であるチエリーの切なる乞こいではあつたが、バットを与えることを断だん然ぜん拒こんだわけだつた。

チエリーは拒絶きよぜつされると、もう我慢しきれなくなつた。どうしてもあの薬を手に入れなければならなかつた。暴力に訴えても、たとえ殺人をしても……。彼女は全く気が変になつて、あの重い砲丸を頭上に持ち上げた。金はこの思いがけない危険に室内を逃げ廻つているうちに、とうとうチエリーのために鉄の砲丸を擲なげつけられてしまった。そしてあのような悲惨な最期さいごを遂とげたのだつた。

さてそれから、チェリーは室内を葡はいまわって、魔薬まやくの入った煙草を探した。遂つひに煙草の隠いんとく匿場所がわかって、八本の特製のゴールデン・バットを手に入れた。彼女はそこで貪むさぼるように、あの煙草を喫つたのだった。喫っているうちに、次第に薬の効目ききめはあらわれた、彼女は平衡へいこうな心を取りかえたのだった。彼女がソツと現げんじょう場を逃げだしたのは、それからだった。——（海原力三うなばらりきぞうが殺人の目的で忍びこんだときは、既に金が重傷を負っていた後のことだった）

チェリーは外へ逃げだったが、そこで深夜の街を歩いていた丘田医師に搦つかまつたのだった。搦るといふよりも、むしろ助けられたといった方が当っていた。丘田はチェリーの唯ただならぬ様子からそれと察して、幸い独身者の気楽な自分の家へ連れてかえつたのだ。その後、二人の仲が如何に発展したか、それは云うまでもないことである。

ところで金のところにあつたヘロインの袋は一体誰が盗んだのか。これはいまだに明めいり瞭ようではないのであるが、帆村の説によると、既に金のところへ度々呼ばれて行つた丘田医師が、金の隙すきをみて秘かに奪いとつたものではなからうかと云っている。あの種の中毒患者にはそんな隙などはザラにあることに違ちがひなかつた。

丘田医師は、盗みとつた魔薬を悪用し、金と同じ手を用いて、カフェ・ゴールデンバツ

トに君臨くんりんしたのだった。幸い医者だった彼は、その後の中毒女たちに投薬することに非常に巧みたくだった。だから女たちは、中毒者のようには見えなかったのだ。しかし最後に来て、運命の悪戯いたずらというか、天罰というか、丘田医師が魔薬を失い、遂に彼自身は金と同じように気が変になり、女たちも薬を断たたれて、一勢に中毒者としてその筋に発見されるに至ったのだった。中でもチェリーの中毒症状は殆んど致命ちめいてき的だと診断を下くだされた。しかし一体誰が、丘田医師のところからヒロインを盗み出したのだ。丘田医師はかねてヒロインを手にしてからというものは、パントポンの代りに、この粗製品を使って世間を胡魔ごま化かしていたことは、帆村の調査によって証拠だてられたところだ。——実をいうと、帆村はこのことについて何も云わないのであるが、丘田医師のところへ検しらべに行つた夜、ゴードン・バットの傍そばの橋の上から、なにか白い紙包を川中に投じたが、あれが丘田医師のところにあつたへロインではあるまいかと、私は考えている。あの高い柵の上にあつた銀ぎん玉たまはきつと真中から二つに割れるボンボン入れのようなものであつたらう。

海原力三は無罪となり、放免された。

しかし丘田医師は、あの夜から、どこへ逃げたものか、行方不明である。——しかし後日談を云うと、あれから三ヶ月ほどして、帆村は大阪の天王寺てんのうじのガード下に、彼らしい

姿を発見したという。しかし顔色はいたく憔悴し、声をかけても暫くは判らなかつたという。丘田医師は、今もさる病院の一室で、根気のよい治療を続けているという。流石は医師である彼のことだと、医局では感心しているそうだ。だが元々医師であつて、モルヒネ劇薬の中毒が恐ろしいことはよく判つている筈なのに、どうして彼がモヒ中毒に陥つたのか。これはまことに興味ある疑問である。

そのことについては、吾が友人帆村莊六も大いに知りたがつていたところだが、或る時当の丘田医師から聞きだしたといつて、秘かに話してくれた。嘘か真かは知らぬけれども、「……丘田氏は、自分でモヒを用いた覚えのないのに、中毒症状を自分の身体の上に発見したそうだ。注射もせず、喫いも呑みもせぬのにどうして中毒が起つたか。その答は、たつた一つある。曰く、粘膜という剽軽者さ」

そういわれた瞬間、私の眼底には、どういふものか、あのムチムチとした蠱惑にみちたチェリーの肢体が、ありありと浮び上つたことだつた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1933（昭和8）年10月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ゴールデン・バット事件

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>